

佳作

友達の木

茨城県 日立市立豊浦小学校四年 河合 叡佑

「ひまだな〜。」

二年生の時、友達があまりいなかった。ぼくは、一人で過ごす時がありました。ひまな時は、よくグラウンドの周りをぶらぶらとさんぽしていました。そうしていると、なんだか、すがすがしい気持ちになるからです。その時も、ぼくはなんとなく歩いていました。

すると、虫たちがたくさん集まってひときわにぎわっている木を見つけました。ありやダンゴ虫、くもなどたくさん。虫にかこまれて、たいそう木もうれしそうに見えました。みきも太くまっすぐのびていて、とてもがっちりとしていました。

「しっかりした木だな〜。」

そこで、ぼくは、その木にしばらくよりかかって

いました。何分かした後、休み時間の終わりをっけるチャイムが鳴り、ぼくは、木に向かって、

「さようなら〜。」

と言い、教室に急いでもどりました。

それからというもの、ぼくは、雨がふっている時、いいは、毎日その木のもとに通いました。

木と出会ってから何か月かたったある日、いつものようによりかかっていると、あることに気づきました。木によりかかっている時は、ものすごくリラックスしているのです。ぼくは、思わず声を出してしまいました。

「いままで気づかなかったけれど、本当はこの木にす〜ぐいやされていたんだ。」

ぼくは、その木をよりいっそうすきになりました。ぼくは、その木に名前を付けることにしました。その名前は、「友達の木」です。

友達の木は、悲しい時や、友達にいじわるをされた時、どんよりとした気持ちの時には、いつも、しんせん空気をを出していやな気持ちを体の中から外においだして、ぼくをなぐさめてくれているように感じました。

ぼくは、チャイムが鳴って急いで教室にもどる時、

友達の木へ、「さようなら。よりかからせてくれてありがとう」、この言葉を必ず言っています。本当はしてないけれど友達の木と心の中で会話をしているような感じですよ。

友達の木は、ぼくよりずっと年上の先ばいです。その木は豊浦小学校のうつりかわりを見てきたと思います。昔のことをしっていると、昔の事が聞きたくなってよけいに木がすきになってきます。

木は、百年いじょう生きるものもいます。友達の木は、これからもずっと小学校のうつりかわりを見ていくと思います。もっともっと生き続けて小学校のこれから見つづけてほしいです。

そして何より、台風なんかになんかに負けずに、しっかりとくましく生きていってほしいです。